

# 国際 I C T 利用研究学会 論文誌

Journal of International ICT Application Research Society

JIIARS

2026年 第8巻 第1号

March 2026 Vol.8 No.1

1

# 目次

## 巻頭言

社会問題解決のためのシリアスゲームの役割 国際ICT利用研究学会 理事	佐藤 礼華(大阪電気通信大学).....	1
--	----------------------	---

## 論文

吾妻小富士における雪形の時系列変遷の気候要素との関係と 温暖化傾向にみる将来予測 佐藤 由美子(元 福島大学大学院).....	3
教育カウンセリングはインストラクショナル・デザインの効果を補強する 神崎 秀嗣(秀明大学 看護学部).....	15

## 編集後記

国際ICT利用研究学会 評議員	三好 善彦(埼玉女子短期大学) .....	20
-----------------	-----------------------	----

## 社会問題解決のためのシリアスゲームの役割

国際 ICT 利用研究会  
理事 佐藤 礼華

私はこれまでデジタルゲーム分野において教職に携わり、一般的なエンターテインメントゲームから、教育現場で有効に活用されるシリアスゲームに至るまで、授業、研究、教育、開発の各側面から関わってきた。近年、シリアスゲームの有効利用が社会的に広がりを見せる中で、ゲームが学習や社会課題解決に果たす役割はますます重要となっており、私自身もシリアスゲームに対する関心を一層深めている。

シリアスゲームとは、単なる娯楽を目的とするものではなく、教育、医療、訓練、社会問題への意識喚起など、特定の目的を持って設計されたゲームである。楽しさや没入感といったゲーム特有の要素を活かしながら、知識や技能の習得を促し、人々の行動や意識の変化を導くメディアとして発展してきた。

私のこれまでの経験としては、建築遺産に関する教育支援システムの開発、医学生教育用マルチメディア教材システムの構築、認知症予防を目的としたトレーニングゲーム、子どもの学習を支援する教育ゲーム、さらには安全意識、記憶力、判断力、思考力、反応力などを養う脳トレーニングゲームの制作と応用など、さまざまなシリアスゲームに携わってきた。これらの実践を通じて、ゲームが持つ教育的・社会的価値の大きさを実感している。



また、これらの開発においては、3DCG や VR/AR をはじめとする先端技術を積極的に活用することで、より高い臨場感や学習効果を実現してきた。こうした技術の進歩により、シリアスゲームの表現手法や応用領域は大きく広がり、その可能性は今後さらに拡大してい

くものと考えられる。

さらに、時代の発展とともに AI 技術が急速に進歩し、シリアスゲームの内容設計や制作技術の高度化を強力に支えている。個々の学習者に適応した体験の提供やリアルタイムフィードバック、高度なシミュレーションの実現など、AI との融合によってシリアスゲームは新たな段階へと進化しつつある。

このように、シリアスゲームは技術革新と社会的ニーズに支えられながら発展を続けており、その可能性はまさに無限であるといえる。私自身も、この分野におけるさらなる研究と実践に挑戦し続け、教育と社会の発展に貢献していきたいと考えている。

本論文集では、情報社会の実現に向けたさまざまな研究成果が取り上げられており、その中にはシリアスゲームに関わる領域も数多く含まれている。シリアスゲームは、情報技術、教育、医療、社会課題といった複数の分野を横断する存在であり、本論文集に収められた研究は、その新たな可能性を探る重要な示唆を与えるものである。本書が、多くの研究者や実践者にとって有意義な知見を提供し、シリアスゲームのさらなる発展に寄与する一助となることを願ってやまない。

## 略 歴

1961 年 北京生まれ

2000 年 大阪大学環境工学研究科 博士課程単位取得退学 博士（設計学）

2003 年 大阪電気通信大学 総合情報学部 デジタルゲーム学科 准教授

現在の研究テーマは、教育・医療・社会課題など多分野におけるゲーム開発およびその応用に関する研究である。

## 編集後記

2016年10月に活動を始めた本学会は満10年という大きな節目を迎えようとしています。新年度の2026年を迎え、ここに学会論文誌第8巻第1号をお届けできる運びとなりました。会員の皆様には、日頃より多大なご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

10年間を振り返れば、本学会の研究活動の幅は着実に広がってまいりました。2020年からのコロナ禍では、さまざまな活動が制限される困難に直面しましたが、それを機に研究発表や会議などの現場ではICTを活用してのハイブリッド実施が日常のこととなりました。また近年では、ChatGPTやGeminiをはじめとする生成AIの急速な進化・普及、さらにはDX（デジタルトランスフォーメーション）の進展により、ICTの活用は単なる「効率化の道具」から「社会構造を再定義する基盤」へと変貌を遂げています。

こうした激動の時代の中で本学会の果たすべき役割は重要であると考えています。AIの利活用が当たり前となった現在、その利便性のみを追求するのではなく、情報の真偽を確かめるファクトチェックや著作権問題など、さまざまな課題への対応も必要になります。これらの課題は、AIを利用する際の倫理観に集約されると言っても過言ではありません。今後は、研究者としての倫理観に加え、AI利用者としての倫理観が、私たち一人ひとりに問われていくことでしょう。

このようななか、全国大会や研究発表では、教育、ビジネス、地域創生など、多様な分野におけるICTの可能性が示されており、活発な議論が交わされていることを喜ばしく感じております。なかでも、全国大会や研究会などで次代を担う学生たちの研究発表が活発にされていることに深い感動を覚えます。熱心に学生たちを導き、研究をサポートされている指導者の先生方には敬意を表するとともに感謝に堪えません。

技術の進化が加速度的に進む現代において、本学会の役割はますます重要になっています。理論と実践の両輪を回し、新たな知見を社会に還元していくためにも、引き続き会員の皆様の研究活動がさらに活発になることを願っております。次の10年に向けて、引き続き変わらぬご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

国際ICT利用研究学会 評議員

埼玉女子短期大学 商学科 学科長 教授 三好善彦

---

### 国際ICT利用研究学会論文誌 第8巻 第1号

Journal of International ICT Application Research Vol.8 No.1

2026年3月22日 発行

発行者 国際ICT利用研究学会論文誌編集委員長 山下倫範

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 [office@iiiar.org](mailto:office@iiiar.org)